

## 2013 年度 入学 試験 問題

# 国 語

(試験時間 15:00~16:00 60分)

1. 解答用紙は、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。
2. 解答は、必ず解答欄に記入してください。なお、解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。
3. 解答は、**HB**の鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。また、折りまげたり、汚したりしないでください。記述解答用紙の下敷きにマーク解答用紙を使用することは絶対にさけてください。
4. 解答用紙には、受験番号と氏名を必ず記入してください。
5. マーク解答用紙の受験番号および受験番号のマーク記入は、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないよう特に注意してください。

— 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(50点)

東日本大震災を生じた地震や津波は「想定外」の大きさであったといわれている。そのために津波による多くの人命の損失や、福島第一原子力発電所の事故もおこったとされている。しかし自然災害は、人間の「想定」などとは無関係におこることであるから、「想定外」というのは、あくまで人間が想定しなかっただけのこと、そのことは防災対策にケツカン<sup>(1)</sup>があったために被害が生じたことに対する、いいわけにはならないともいえる。しかし人間が未来を予知する能力には限界があるから、いわば後知恵で、「あのような事態が生じることを想定しておくべきであった」と批判することも適切であるか否か疑問である。

地震、津波、あるいは台風、暴雨等の自然災害は、いつ、どこで、どのような規模のことがおこるかわからない(台風などは季節は特定されるが)。防災は、このようにいつ来るかわからない「天災」に備えることを意味する。防災対策が適切であれば、自然災害が実際に発生したときに大きな効果をもたらすが、もし自然災害がおこらなければ、それはいわば「空振り」に終り、そのコストはムダになる。どのような対策が適切であるかは、実際に災害がおこってみなければわからないことがあるから、多くのコストをかけた対策が、実は効果がなかったということになるかもしれない。防災対策は、「おこるであろう」と思われる災害の形を想定して計画しなければならぬが、現実には「想定外」のことがおこったり「想定内」のことがおこらなかつたりする。そこには「不確実性」が避けられない。

地震や津波に関して、自然科学的研究は進んでいるが、まだその発生する場所、日時、規模をある程度以前から予測することは不可能である。地震や津波は、地球の物理的変動の一部であって、基本的には物理学の法則に従うはずであり、もし観測データが蓄積され、理論的カイセキ<sup>(2)</sup>が十分進歩すれば、日食や月食を正確に予測することが可能になったように、地震や津波が完全に予測できるようになるかもしれないとも考えられる。しかし地震や津波のような複雑な現象は、ピサイ<sup>(3)</sup>な初期条件の違いが大きな結果の違いをもたらす、「カオス」としてモデル化されるような、いわば本質的な偶然性、あるいは予測の限界を含んでいるということも考えられる。いずれにしても、すくなくとも現在のところ、確実な予測は不可能である。

けれどもこれまでの経験の蓄積や、科学的観測技術の発達、理論の進歩によって、自然災害についても、どのようなことが、いつどこで、「おこる可能性が高い」「おこるかもしれない」「おこる可能性は小さい」という判断はなされるようになった。その可能性の大きさを数字で表現したものが「確率」である。防災対策も、おこりえる災害の確率を基準として考えられることが多い。

確率とは簡単にいえば、「ある事象がおこる可能性の程度、あるいは確からしさを数量的に表現したもの」といえるが、ここでさらにその値は何を意味するかについては古くからいくつかの説があり、論争があつた。それには大別して、客観確率論<sup>(4)</sup>とヒンド説と主観確率論との二種類がある。それについてくわしく解説する余裕はないが、簡単にいえば、前者はくり返し可能で、結果が無規則に現れるような現象について、多数回の中で特定の事象が現れる比率をその確率とするものである。サイコロをくり返し投げると、たとえば一の目の出方は規則性がないが、多数回投げるとほぼ六分の一にあたる回数だけ一の目が出るとすれば、このサイコロを投げて一の目が出る「確率」は六分の一であるといふのである。主観確率は、これに対して、くり返し実験ができないような事象についても、それがおこる可能性の大きさについての判断を表すと考えられるものである。このような判断は、判断を下す人が事象について持っている知識や情報などによって異なるから、基本的に主観的なものといえる。主観確率にはいろいろな程度があり、ただ単に「そのように思われる」というような心理確率というべきものから、十分な証拠と論理によつて導かれ、多くの人々の意見が一致する場合まで、いろいろなレベルがある。後者のような場合は「判断確率」あるいは「論理確率」といつてもよいであろう。

客観確率と主観確率の基本的な違いは、前者は「確率」が (5) であると考えられるのに対して、後者では特定の事象はおこるか、おこらないかのどちらかであつて、「確率」はそれに対して人々が下す判断にすぎないといふことである。したがつて前者については、未知の「真の確率」というものが考えられる。たとえば、あるサイコロが歪みをもっているとすれば、すべての面が同じ程度に確からしいとはいえない。そこで一の目が出る「真の確率」は六分の一とは異なるかもしれない。その値はサイコロを多数回振つてみて知ることができる。

これに対して、たとえば「ある地域に今後三〇年以内にマグニチュード七・〇以上の地震がおこる確率は三〇%である」という場合、それは専門家が過去のデータや科学的知見をまとめた判断の結果である。そこでたとえば過去三百年にこのような地震が三回、つまり三〇年に〇・三回の率でおこっていたとしても、上記のような判断はあくまで次の三〇年という特定の期間に関するものであって、今後千年間にはほぼ十回おこるであろうなどということの意味しているわけではない。過去におこった回数(6)は「判断確率」を計算する上での一つの根拠であるにすぎないのである。

地震は客観的事実としてはおこるかおこらないかのどちらかであって、〇・三回だけおこるといふことはありえない。その「確率」というのは、そのおこる可能性、あるいはおこることの「確からしさ」の判断を数字で表したものであるにすぎない。もちろんこの場合、確率の数字は、過去の記録や科学的知見を総合して専門家が与えたもの、あるいは科学的理論にもとづくモデルと観測データを結びつけ算出されたものであるが、それは専門家のある程度主観的な判断も入っており、モデルの選択にも恣意的な部分も入らざるをえないので、結果の数字は、専門家により、あるいは計算を行った機関により変わりえる。また科学的研究が進んだり、新たな事実が観測されたりすれば、確率評価も変わるのが当然である。

確実な予測が不可能な場合、災害によってもたらされる被害の大きさや、対策の効果を評価する場合には、ある事象がおこったときに生ずる損害や、利益（対策によって減らすことのできる損害）の額にその確率を掛けて得られる「期待値」が基準として求められることが多い。

しかし期待値が有効な基準となるのは、同様な条件の下での「試行」がくり返されて事象のおこる比率が、その確率に近づく場合、すなわち「大数法則」が成立する場合である。その場合には平均損失、あるいは平均利益は期待値に近づくから、期待値を基準として行動することが意味をもつ。しかし一回限りの事象については、それはおこるかおこらないかのどちらかであるのと同様、損失や利益は大きいか小さいかであって、期待値に等しくなるわけではない。したがって期待値は行動を決定するときの一つの尺度にはなるけれども、それ以上の意味をもつものではない。

かつて私は原子力発電所の安全性について論じた論説の中で「原子力発電所が大きな事故を引きおこす確率はきわめて小さく、

一万人の死者が出るような事故がおこる確率は年に一万分の一以下である。したがって年間死者数の期待値は一以下である。これに対して自動車による交通事故の死者数は年間一万人以上（その当時は一万人を超えていた）である。したがって原子力発電所は自動車よりも一万倍以上安全である」という文章を読んだことがある。<sup>(7)</sup>このような議論はナンセンスである。原子力発電所の大事故はおこらなければ死者はゼロであるし、もしおこって一万人も死者が出るようなことになったら大変であって、その時「期待値は一人であった」といっても無意味である。またその時は死者の数だけでなく、それ以上に国民を不安におとし、これ、  
国に対する信頼も揺るがすようなことになる。

また期待値計算を行うときには、一定の事象がおこったときに生ずるすべての事態を単一の尺度、ほとんどの場合金銭によって評価しなければならないが、そのことは人命も「金に換えなければならない」ことを意味する。もちろん人命も「無限に大きい価値をもつ」とすることができないのも現実である。しかしそのことと「(8)」としてよいということは、まったく別である。「人命は金に換えられない」というのは、人間社会が守るべき理念であり、理想である。だから「人命損失によって支払わなければならないなくなる保険金、あるいは<sup>(9)</sup>バイシヨウ金の期待値は、人命を守るための安全対策費より安い、したがって安全対策を行わないのが合理的（あるいは市場の示す効率性）である」といったら非難されるのが当然である。現実に理想を貫くことができない場合があるのは事実であるが、それは現実と理想との矛盾であって、やむをえないことであると同時に、できるだけ現実を理想に近づけるよう努力しなければならないのである。

〔竹内啓「確率的リスク評価をどう考えるか」による〕

〔問一〕 傍線(1)(2)(3)(4)(9)のカタカナを漢字に改めなさい。（楷書で正確に書くこと）

〔問二〕 空欄(5)に入れるのもつとも適當なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 対象となっている事象そのものの性質
- B 人々の意見が必ず一致する事象のもつ特徴
- C 必ずおこる事象についての論理的な推論
- D 無規則にくり返される事象についての判断
- E くり返しおこなうことが可能な事象の無規則性

〔問三〕 傍線(6)「今後千年間にはほぼ十回おこるであろうなどということの意味しているわけではない」とあるが、その理由としても適當なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 地震についての科学的解明はいまだに不十分であるため、おこる確率はそう思われる程度の予想にしかすぎないので。
- B 地震の確率は完全に客観的なものではありえず、あくまで専門家がそれぞれで判断する要素を含まざるをえないので。
- C 過去におきた地震についてデータを完全に集めることはできないため、こうだろうという心理的予想しかできないから。
- D 地震はおきるかおきないかのどちらかしかないので、何回おきるかという確率にはなじまない自然現象であるから。
- E 過去の地震回数は判断するさいの一つの根拠にすぎず、判断の根拠が複数なければ予測する意味がなくなるので。

〔問四〕 傍線(7)「このような議論はナンセンスである」とあるが、その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 原子力発電所の事故の場合は交通事故のように死者が出ないとしても、健康被害などをもたらすため、被害の実態を正確にとらえることができないので。

B そもそも原子力発電所の事故で一人もの死者が出たことがないため、想定自体が誤ったものになっているから、交通事故との比較は不可能なので。

C 原子力発電所の事故での死者は交通事故のように毎年一定数あるわけではないし、事故にともなう社会的な影響もきわめて大きく、単純に比較することはできないので。

D 交通事故の場合には「期待値」を算定することは可能であるが、原子力発電所の事故についてはそもそも「期待値」を算定することなどできないため。

E 交通事故の死者は多数出ているのに、毎年のごとでなれている国民は不安にならないが、原子力発電所の場合には事故がおきなくとも不安が大きいため。

〔問五〕 空欄(8)に入れるのにもっとも適當なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 人命の価値は無限に大きいといえるが、金銭に換えるためには人命の損失も物質的損失と同じ尺度の市場価格ではないわけにはゆかない

B 人命も一定の価値、というより市場価格があり、それによって人命の損失も物質的損失と同じ尺度で比較することができる

C 人命は無限の価値をもつというわけにはいかないので、物質的損失の尺度である市場価格とは異なる独自の価格の尺度を定めなければならない

D 人命の価値は一定しているため、物質的損失の尺度である市場価格のように変動することはないので、無理に金銭に換える必要はない

E 人命の損失は金銭によって評価できないが、それはあくまでも理想にすぎないので物質的損失と同じ一定の市場価格の尺度ではからねばならない

〔問六〕 本文の趣旨にしたがうと、筆者はどのような防災対策が必要と考えているのか、「確率」と「不安」という言葉を入れて

五〇字以内で書きなさい。(句読点は一字に数える)

〔問七〕

次の文ア、イ、オのうち、本文の筆者の考えと合致しているものにはA、合致していないものにはBの符号で答えなさい。

- ア 客観確率と主観確率で確率の意味が基本的に異なるので、両者を確率としてまとめて考えることには無理がある。
- イ 歪みをもつサイコロで一目の目がでる確率が六分の一ではなくとも、何回も振ると六分の一に近づく他の目もある。
- ウ 人命が無限の価値を持つというのは理想であり、理想を現実近づけるために期待値に基づく安全対策をすべきだ。
- エ 地震がおこるかどうかが予測することは困難ではあるが、自然現象なのでいつか正確な予測も可能になるだろう。
- オ 何回も繰り返すことが可能な事象でなければ、期待値を算出しても実際に行動するうえで大きな意味をもたない。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(20点)

少なくとも絵画の場合には、タイトルは近代のものであり、タイトルの美学は近代美学の重要な一面を表している。タイトルの美学としての近代美学は次のように考える。作品は虚心坦懐に見ればよい、というような端的な対象ではない。なにゆえにそれが面白いのか、どこにその見どころがあるのかを、同時に説明してやることが不可欠である。というのも、単なる物的対象とは異なる意味の次元が作品にはあり、この次元こそが物的対象としての作品に、生命を与えているからだ。この《説明の必要性》は、評論の役割を飛躍的に高めたが、評論家の発言を俟つまでもなく、作家自身が作品と一体のものとして、自らのメッセージを発した。それが、近代的なタイトルである。タイトルは、作品「について」、(1) という指示を行うメタテキストである。驚なまえて言うならば、立体映画の赤と緑の色眼鏡のようなものだ。このフィルターを通して初めて、世界は遠近をともなって見えてくる。作品とはこの遠近法なのだ。概略これが、作品にタイトルをつける思想の、すなわちタイトルの美学の中心テーゼである。

アヴァンギャルドたるデュシャンは、「泉」において、アカデミックな美学と「ブルジョア的」な藝術とを否認したが、タイトルの美学を否定したわけではない。(2)、そのニヒリズムの藝術思想をタイトルにおいて表明したのであり、タイトルはかれの重要な武器でさえあった。(3)、更に進んで、タイトルの美学そのものを否定する立場がある。その典型が「無題」というタイトルに示されている。(4)、「無題」にも二つのケースがある。一つは、作家がタイトルをつけることを拒絶して「無題」としたケース、もう一つは、単にタイトルが知られていないために、人々が「無題」と呼んでいるケースである。タイトルの美学を否定しているのは、言うまでもなく、第一のケース、(5) 真の意味での「無題」である。

タイトルの存在を否定したとき、作品は意味の遠近法を喪うしない、表面的なもの、純粹感性的(あるいは美的)なものとなる。しかし、それはタイトル以前の状況に帰ることでは全くない。画題えがくはタイトルの時代にあつては、タイトルはなくとも、タイトルのようなものが流通し、それで何の不自由もなかった。例えば、多くの富士山の絵が「富士山の絵」であつて、おれわれの理解

に過不足がないのと同じである。この自明性が、裸になった「無題」の作品には欠けている。作者が意味づけることを拒んだその分だけ、「無題」の作品は難解になり、逆に、それだけ多くのティスクール（言説）を引き寄せる。この逆説を、「無題」というタイトルそのものが象徴している。

「無題」は一種の類型的なタイトルであって、昔の作品のように単にタイトルがない、というのではない。タイトルがあるべきものである、とみなされているからこそ、「無題」と名乗ることによって、タイトルの次元を否定することができるのである。タイトルは不可欠のものであり、タイトルを否定する意見表明さえ、タイトルを通してなされるというのは、タイトルが完全に制度的なステイタスに達したことの現れである。

このように、「無題」はタイトルの美学との緊張関係のなかにある。しかし、藝術は、否認をも超え、タイトルからの逃走の態勢にあるように思われる。一九九九年、東京の伊勢丹美術館で開催された「サンフランシスコ近代美術館展」に、一点の興味深い絵画が展示されていた。それはアメリカの現代画家クリフォード・スタイルの一九四五年の作品で、そのプレートには、「無題（前タイトル・セルフポートレート）」と書かれていた。すなわち、一度「自画像」というタイトルが与えられたあとで、作者によってそれが撤回され、「無題」に変更されたのである。ちなみに、画面そのものは抽象表現主義の典型と見られるようなもので、どう見ても、自画像には見えない。このようにタイトルを変更する事例は例外らしい。作品が変化したのではない。変わったのは作品に関する作者の思想である。古い思想を表現していた「セルフポートレート」を否認することが、その「無題」の意味である。その後この作家の絵画作品につけられたタイトルは、「ISID」とか「PH386」のように、ことごとく無表情なものとなる。それが無表情なのは、もはやなまえてさええないからである。「シャネルNo.5」や「CK1」には豊かな表情があった。音楽家の作品番号をなぞったそのスタイルが、藝術作品のステイタスに憧れ、それを横取りするような素振りのもので、そういう表情をたたえていた。それに対して、完全に無表情なものとなったスタイルのタイトルは、純粋に機能的なID番号を思わせる。「無題」というタイトルには、タイトルの美学を否定する意思が表現されていた。ID番号化したタイトルは、

(8)

（佐々木健一「タイトルの魔力」による）

注 デュシャン……マルセル・デュシャン（一八八七―一九六八）。フランス出身で、アメリカで活躍した前衛的な美術家。

〔問一〕 空欄(1)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A それをそれぞれの段階「を経て見よ」
- B それをかくかくの方法「によつて見よ」
- C それをしかじかのもの「として見よ」
- D それをさまざまな視点「から見よ」
- E それをおのおのの感覚「に従つて見よ」

〔問二〕 空欄(2)(3)(4)(5)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A もつとも
- B ところが
- C たとえば
- D むしろ
- E すなわち

〔問三〕 傍線(6)「それだけ多くのディスクール(言説)を引き寄せる」とあるが、その意味としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A どのように考えたらよいか分からないので、いろいろと考えをめぐらせることになる。
- B どう評価すべきか意見が分かれるので、長い時間をかけて検討がおこなわれる。
- C 一つの作品だけで理解することが難しいので、多くの作品との比較が必要になる。
- D 神秘的な魅力をもつことになるので、たくさんの鑑賞者の興味をひく。
- E 作品技法の遠近法がわからないので、さまざまな角度からの分析が求められる。

〔問四〕 傍線(7)「無題」はタイトルの美学との緊張関係のなかにある」とあるが、その関係を説明するものとしてもっとも適

当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A タイトルの美学は時代によって変化するため、「無題」とすることの意味もそれにつれて変わらざるを得ない。
- B 「無題」とすることでタイトルの美学を否定できるのは、タイトルがすでに前提として存在しているからである。
- C タイトルは絶えず更新されるべきというタイトルの美学をつきつめれば、「無題」というタイトルにたどりつく。
- D 最良のタイトルを追求するのがタイトルの美学であり、「無題」はその途上にあることを端的に示すタイトルである。
- E 「無題」とすることによって、タイトルの美学について無の状態に立ち返って考えることができる。

〔問五〕 空欄(8)に入れるのもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 思想とタイトルの関連の消滅を物語る
- B いずれ識別形態化するタイトルの未来を提示する
- C タイトルの美学の否定そのものを否定する
- D いっそう有効にタイトルを虚無化する
- E タイトルの美は機能性にこそあることを主張する

三 次の文章は『宇津保物語』の一節である。七歳になるいぬ宮に琴の秘曲を伝授するため、父の大将仲忠・祖母の尚侍のおとどは、いぬ宮を母親のもとから引き離そうとするが、母である女一宮はこのことを辛く思っている。これを読んで、後の間に答えなさい。(30点)

「これこそまがまがしかめれ。琴弾く人は、思ふ人見ず、離れてや習ふ。静かなる所はさもありなむ。一年ばかりはとあれば、いとあさましく。幼ければ、何心なく、いつとも知らず、離れてあらむとものしけるにこそあんなれ。しばし人々のものせらるる時、あなたにあるをだに、心もとながりまつはすものを、わびしともこそ思へ。いかなるべきことにかあらむ。」と、いと心苦しげにのたまへば、大将、「ことわりなりけれど、何ことも、心に入れて習ひ移すにのみこそ、人より殊に侍れ。幼くおはせむも、心苦しとてやは。思ふやう侍るものを。さらば聞こえさせじ。ともかくも御心なり。ここには教へたてまつらじ」と、まめやかに聞こえたまへば、さてあべいことならねば、宮もこのことを、心殊にいかでかと思すことなれば、「さらば念じてこそあらめ」。

宮、「久しう見たてまつらざらむを」とて、明けぬれば、暮るるまで、いぬ宮、雛遊ひななびしたまふ。「ほかにては、恋しく思ひたまふべしや」とのたまへば、「いかがは。琴の弾かまほしければ。念じてやおはせむずる。みそかにはおはせかし。」この雛にもや聞かせじとする」とのたまへば、いとあはれにをかしう覺えたまひて、「などてか。率ておはせ。大将をば、聞きとぞ聞くのみに。雛遊びは時々をしたまへ。琴を心に入れたまへ」とて、「いと面白く弾かむと思せ」など聞こえたまふに、久しく見たてまつりたまはざらむことの、いみじく恋しく覺えたまふべきを、うちまはりたてまつりたまふに、涙のこぼれぬべければ、今少しも聞こえたまはず。苦しと思すまじきことを語らひたまふ。

(『宇津保物語』による)

注 これこそ……幼い子が家族と離れて芸の道に励むこと。 あべい……あるべき

〔問二〕 傍線(1)「ものせらるる時」、(2)「まめやかに聞こえたまへば」、(4)「念じてこそあらめ」、(8)「うちまぼりたてまつりたま

ふ」の解釈として最も適當なものをそれぞれAとDの中から選び、符号で答えなさい。

(1) ものせらるる時

- A 琴を教えて下さっている時
- B 口論などをなさっている時
- C 訪ねてきていらつしやる時
- D 琴をお弾きになっている時

(2) まめやかに聞こえたまへば

- A やさしげにたしなめなさるので
- B 真剣に説得なさるので
- C 優美に申し上げなさるので
- D 意地悪に申し付けなさるので

(4) 念じてこそあらめ

- A 辛抱いたしましたしょう
- B 覚えておきましたしょう
- C 謝罪いたしましたしょう
- D 祈願いたしましたしょう

(8) うちまぼりたてまつりたまふ

- |   |                |
|---|----------------|
| A | 抱き申し上げていらつしやる  |
| B | ご想像申し上げていらつしやる |
| C | お守り申し上げていらつしやる |
| D | 見つめ申し上げていらつしやる |

〔問二〕 傍線(3)「さてあべいこと」とはどのようなことを指すか。もつとも適當なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 大将がいぬ宮に琴を伝授しないということ。
- B 女一宮がいぬ宮と離れなければならないということ。
- C 大将が勝手を振る舞いをしていいということ。
- D 女一宮の発言が身勝手であったということ。
- E その道をきわめたい人は、誰よりも熱心に稽古しなければならないということ。

〔問三〕 傍線(5)「たてまつら」、(6)「たまふ」、(7)「おはせ」の活用形として適當なものを左の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

- A 未然形
- B 連用形
- C 終止形
- D 連体形
- E 已然形
- F 命令形

〔問四〕 いぬ宮への琴の伝授について、大将はどのような考えをもっているか。本文と合致しないものを左の中からひとつ選び、符号で答えなさい。

- A どんなことでも、念入りに師から技を伝授された場合にのみ、人より上手になれるのだ。
- B いぬ宮はたしかにまだ幼く、いくら琴の稽古のためでも母親と離すのが気の毒ではある。
- C 幼くていらっしやるからといって、熱心に教えては気の毒だといっている場合ではない。
- D 自分にはきちんと考えがあつて今回の伝授を提案したのに、否定されるとは心外である。
- E いぬ宮をどうするかは父親である自分が決めるべきで、母親は口出しするべきではない。

〔問五〕 女一宮は、いぬ宮にどのような言葉を言つて聞かせたか。本文と合致しないものを左の中からひとつ選び、符号で答えなさい。

- A 私のもとから離れてしまつて寂しくはありませんか。
- B どうして離れられましょう。私のごとも連れて行つてください。
- C 父の大将はいろいろ言うでしょうが、とりあえず聞いておけばよいのです。
- D 琴の稽古をうけている間は、雑遊びは少しにして、琴の練習に専念しなさい。
- E 美しい音色で弾きたいと思ひながら練習に励みなさい。